

日本人学生の英文スピーチの効果的な添削方法の研究

Study on effective correction of Japanese students' speech drafts

竹 野 茂

This paper is concerned with the effective correction of students' speech drafts. Japanese students are not familiar not only with the speech performance in English but also with speech writing. This paper exposes the difficulties in speech writing in English for Japanese students, and in the way they develop their opinions. The author considers that the difficulties in speech writing for students come from the interference of Japanese (L1), that is "cultural conflict". Through the correction of students' speech drafts, the causes of the difficulties students confront will be apparent. As a result of that, the author will propose the way to help students to resolve their problems in speech writing.

In addition, it is great help for students to know the techniques of paragraph writing. In this paper the application of the paragraph writing for speech writing will be considered.

When Japanese students develop their opinion in English, they must consider it from the viewpoint of cultural interpretation. Therefore this paper also refers to the cultural differences between English and Japanese.

キーワード：スピーチ、ディベート、文化翻訳

目 次

I はじめに	3. 原稿の書き方指導
II 「スピーチ」授業の意義と目的	3-1. 英語文化と日本語文化の考え方の間
1. 「スピーチ」授業の概要	3-2. パラグラフライティングの手法
2. 「スピーチII」で扱うスピーチ	3-3. スピーチの上手な学生の視点・下手な学生の視点
2-1. 紹介スピーチ	3-4. 事実と意見を分ける訓練
2-2. ブックレポート(英語・日本語)	III 結論(まとめ)
2-3. 英文5行スピーチ	

I はじめに

現在宮崎公立大学で行っている「スピーチⅡ」の授業における学生たちのスピーチ原稿の添削を通して日本人学生の犯しやすい文化面での欠落部分を明らかにするとともに、その添削における留意点・添削方法を提案する。

英文スピーチの添削における語彙・表現面での指摘は多いと思うが、これまで文化翻訳の観点から添削時に考慮することはあまりなかったように思う。

英文スピーチに限らず、自由英作文、英文エッセイにおいて、語彙面・表現面も重要であるが、文化翻訳という観点を入れることによって、より効果的な語彙指導・表現指導に至る過程が考えられる。つまり、文化翻訳という観点から語彙の絞り込み、適切な表現の使用が決定できると確信する。この方法を確立することによって、整理されたスピーチ・ライティングが可能になり、意見表明としてのスピーチをより効果的にできる行えるようになるのではないかと考えた。

このようなスピーチの指導は、ディベートにおいてより効果的な意見表明を可能にすると考えられる。ディベートはいくつかのスピーチの集大成として成り立つので、個々のスピーチ指導は、最終的にはディベートへの発展を目して行われるべきであろう。

II 「スピーチ」授業の意義と目的

1. 「スピーチ」授業の概要

スピーチ添削法を論ずる前提として、宮崎公立大学で行っている「スピーチ」という授業について大まかに述べたいと思う。本稿で論ずることはこの授業を通して筆者が考えたことであり、その内容を明らかにすることなしに本論である英文添削法を論ずることはできないという立場から、この授業の内容を論ずることにした。(尚、詳しいシラバスについては参考資料を参照のこと。)

「スピーチ」という授業は、1998年にスタートした。この授業の前身は「英語音声訓練」である。「英語音声訓練」は、2年生を対象にした1年間の授業であった(拙著、「本学における英語音声訓練」授業参照)が、「スピーチ」は3年間を1スパンとする継続的な授業で、1年から始め3年で完結するものである。「英語音声訓練」が主に英語音声の確立に重点を置いていたのに対して、「スピーチ」では文化面・内容面を重視している点に違いが見られる。とは言え、「スピーチ」での音声面が軽んじられているのではなく、授業の期間が長くなったことで、本来「英語音声訓練」でも目指していた文化面・内容面の充実が図られただけのことである。現在日本の大学で、3年間を1スパンと見なし、継続的に設定された目標に向かって訓練をする授業はなく、全く実験的でユニークな試みといえるであろう。

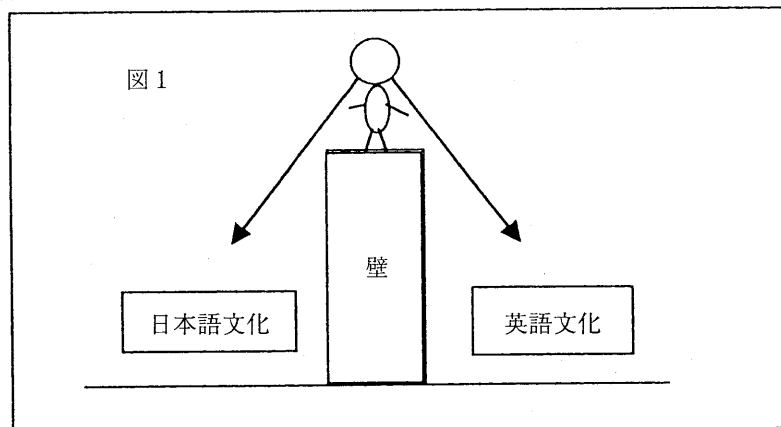
「スピーチ」の成果については、まだ1スパンの途中であるため今後の課題になるが、「英語音声訓練」を4年間行ってきて音声面についての成果は実証されたと考えている。従って、「スピー

チ」においても音声面に関する限り、一定の成果を期待できるのである。しかし、文化面・内容面についてのカリキュラムは、アウトラインの段階で現時点での成果は明言できない。

ここで「スピーチ」の目的を明らかにしておこう。「スピーチ」の1年目については、「英語音声訓練」で行ってきた内容の踏襲である。(詳しい内容については、紀要論文参照のこと。)2年目については、1年間培った英語音声をもとに、M. L. King牧師のスピーチを「表現読み」することから始め、「英語による紹介スピーチ」「英文5行スピーチ」「日本語および英語によるブックレポート」と展開する。3年目は、2年目のスピーチやレポート作成法・プレゼンテーション法をもとにディベートの実践訓練を行うことになっている。「スピーチ」の最終目標は、英語を駆使して議論ができる能力を身につけると同時に、日本文化・日本・日本語の分析・理解を通して、日本人として日本文化と英語圏を中心とした西洋文化、あるいは他文化を等距離に見ることのできる位置に立てることにある。

日本文化と異文化(他文化、多文化)との間に立ち、客観的に両文化を分析できる能力こそ、21世紀に求められる国際人としての能力であると考えられる。このことは「言うは易く、行うは難し」である。人間というものにはどちらかに偏りがちである。完全に客観的な立場に立つことなど不可能であるかもしれない。しかし、常にその立場を目指すことにより、自分と他者を等距離に見つめる努力をすることによって、限りなく近づくことができる視点であるにちがいないと確信する。

かつて著者が中津療子先生の提唱する英語音声訓練を受ける際、先生の「日本語文化と英語文化の間に壁が聳えており、その壁を越えることなくその壁の頂点に立つことを目指すべきである。」という主張(図1参照)に疑問を抱き、先生のおっしゃるその立場とは何かを探し続けて今日を迎えた。著者はまだまだその領域には到達してはならず、日々藻掻いている状態である。しかし、宮崎公立大学で教鞭をとる機会に恵まれ、学生達との格闘の中から微力ながら中津先生の言葉の意味を探ってきた。そして、その言葉に近づく手がかりのようなものを掴みかけている。それは「スピーチ」授業を実践する中から捉えつつあるものであり、現在2年生の学生が「スピーチⅢ」を終了する時点でより確かなものになると確信している。その様な著者の拙い理解と実践が多少



なりとも学生に伝わることを願いつつ、日々の授業に明け暮れているのが、「スピーチ」授業の現状である。

さて、本稿は2年次に開講の「スピーチⅡ」で取り扱う学生のスピーチをどう添削するかを本題とするのであるが、この「スピーチⅡ」で扱う内容について、少し詳しく見てみることにする。「スピーチⅡ」では学生自らが書いた英語によるスピーチ・プレゼンテーションが主な内容になる。具体的に学生は「日本語および英語によるブックリポート」「英語による紹介スピーチ」「英文5行スピーチ」などのスピーチを作り、プレゼンテーションを行った。それぞれのスピーチの内容について以下に述べておこう。

2. 「スピーチⅡ」で扱うスピーチ

2-1. 紹介スピーチ

「スピーチⅡ」における最初のスピーチ課題として、英語による「紹介スピーチ」が出される。この「紹介スピーチ」は、学生の身の回りのこと・もの・人などを紹介してもらおうというものである。

紹介スピーチ要領

時間：3分以内

題材：自分にかかわりのある人・こと・ものを他人に紹介するものとする。

例えば、家族・元のクラスメート・恋人・初恋の人・ペットなどをそれらについてまったく知らない他人に紹介する。自分自身の体験、面白かった (or つまらなかつた) 本や映画、或いは腹の立った事件などを紹介してもよい。

留意点：

- ・ 自分に関わることを他人に紹介するわけで、他人に知らせたいことと他人に知られたくない自分とをしっかりと区別し、自らのプライバシーを守ることに留意する。(Keep your own privacy.)
- ・ 事実を把握し、事実のままに伝える必要がある。知らせたいことは、事情を知らない他人にも客観的・論理的に分かることを目指す。自己を客観的に分析することが必要である。また、他人を楽しませるという要素も必要である。

発表の留意点：

1. 発表の英語音声 (訓練成果が現われているか)
2. スピーチの構成 (a. 導入部分; b. 目玉; c. エンディング) はうまくいっているか ('目玉'とはスピーチにおける主題といってもよく、自分が最も強調して言いたいことのことである。)

以上のような要領のもとに学生たちはスピーチを行うのである。そして、発表されたスピーチを以下のような3つのポイントを中心に聴き、コメントをしていく。この聴き方については学生

にも事前に伝え、他の学生のプレゼンテーションに対してコメントをする訓練も兼ねて行うことにしている。

プレゼンテーション(スピーチ)の聴き方のポイント

- 1) 他者は自分が話す内容についての知識を全く持っていないという前提で、スピーチを作る。
- 2) このスピーチで言いたいことを1つに絞る。
- 3) 効果的なスピーチは、聞いていて映像が浮かび上がるようなものである。

このポイントこそが、学生の英文スピーチ添削法のポイントでもある。このことは第Ⅱ章で詳しく述べることにする。

2-2. ブックレポート(日本語・英語)

2年生の「スピーチ」において、ブックレポートをさせる。どのような手順でプレゼンテーションさせるかという点、まず「スピーチⅡ」開始当初以下のような要領で本を選び、読んで、その本の概要とその本に対する意見を書かせる。今回の場合、事前に原稿を提出させ、簡単なコメントを与えて書き直させた。

ブックレポート図書選定ならびに発表要領

- 1: どのような本を選ぶか: 日本語・日本人・日本文化をまじめにとらえようとするものを選ぶ。
- 2: 準備期間は1~2ヶ月とする。
- 3: 日本語のプレゼンテーションの場合
本の概要(アウトライン) 原稿用紙3~4枚。
意見(オピニオン) 原稿用紙4~5枚。
- 4: 英語のプレゼンテーションの場合
アウトライン A4 40行程度で 1枚。
オピニオン A4 40行程度で 1枚。
- 5: 以上のような原稿を用意した上で、口頭発表をする。(原稿の朗読ではない。)
- 6: 口頭発表は、
アウトライン 2分を目安にする。
オピニオン 3分を目安にする。
- 7: 口頭発表での注意点は、
朗読をしない。(原稿を読むのではない。)
要点を絞る。
意見の的を絞る。(結論に至るまでの一貫性)
できればユーモアを入れる。
音声の明瞭さ。

この要領の1で日本語・日本人・日本文化について書いた本を選ばせた理由として、以下のこ

とが挙げられる。

- (1) 今日の学生は日本の文化についての知識や研究が足りないであろうという前提に立ち、自文化について考えるきっかけとする。
- (2) 自分が選んだ本を通して、日本人としての自らの有り様を問い直し、意見を形成することによって、日本人としてのアイデンティティーの確立を目指すきっかけとする。
- (3) 好むと好まざるとに関わらず、自らの日本人気質に気づき、自己を客観化する態度を養うきっかけとする。

また、なぜ日本語のプレゼンテーションを最初にさせるのかという理由は以下のようなことである。

「スピーチ」は、英語の科目であるが、あくまでも異文化対応のための訓練である。ならば最初から英語でも良からうと思われがちであるが、日本語の特質上からか日本語の教育（いわゆる国語教育）の特質からか、日本語によるプレゼンテーション、スピーチ、議論などは、高校までのカリキュラムの中であまり本腰を入れて訓練されていない。したがって、英語でのスピーチやディベートのプレゼンテーションのみを課した場合、英語のフォーマットや考え方をそのまま入れてくる（あくまでもそれで英語での議論が身につくという仮定の話であるが）だけで、本当の意味での異文化対応訓練になっているかはっきりしない。

まず日本語でのプレゼンテーションをさせることによって、自らが持つ日本人としての（日本語での）思考パターン、文章の組み立てに直面させることになる。聞き手は、それを英語の立場から聴き、コメントすることによって、学生に英語への転換点、文化パターンの違いを母語である日本語で気づかせることになる。このような経験を通して、英語の思考形態を含んだハイブリッドな日本語を確立させようとするのである。

ここで考える「ハイブリッドな日本語」とは、著者がこれまで書いた論文で表明してきた「中間日本語」に他ならない。「中間日本語」には、思考パターンのほかに語彙面のそれもあると考える。（荒木博之先生の著書に多数の例がある。）しかし、同時に自らの意見を即座に英語に直す場合、意見の組み立て方がより重要になると筆者は考えるのである。

このようなハイブリッド思考が可能になれば、日本語で考えたことが曲がりなりにも論理的には英語文化の人々にわかりやすい英語で表現することが比較的容易になるのではないかと確信しているのである。

2-3. 英文5行スピーチ

「5行スピーチ」とは、大体5つの英文で、話者が言いたいこと（目玉）を絞り込んで伝える訓練である。5つの英文という短い中にも、introduction（導入）、body（目玉）、conclusion（まとめ・結論）という構成は保っている必要がある。

とかく長い文章を書こうとすると、言いたいことをあれもこれもと書き散らすことが多い。そ

れでは、的を絞った文章はできない。特に、スピーチの場合は聞き手にとってだらだらとした長いスピーチは魅力のないスピーチでしかない。短くとも論理的にすっきりと的を射た内容を持ったスピーチには感銘を受ける可能性が大きく、理解しやすいものである。そういう考えのもとで、あえて短いスピーチを学生に作らせ、その過程で話者の言いたいことを絞り込むことを学ばせようとするのである。学生には事前にこの訓練の目標を伝えてあるが、実際に5行スピーチをさせてみると、学生が一番苦労するのは言いたいことの的を絞ることであったと言う。

5行スピーチは1回だけで終わりではなく、ことあるごとに学生に課し、その場でスピーチを作ってもらう。抜き打ち的に行うことによって、学生は話題をストックしておく必要性を感じ、日常生活の中での出来事に関心を持つようになる効果を狙っている。日常なことへの関心がディベートでの論点への関心を生むことになると考えるからである。また、ディベートは、1つに的を絞った小さなスピーチの積み重ねで行われるものである。この観点から5行スピーチ訓練は有効であると考えられる。

話題としては、話者が言いたいことであれば何でもかまわないが、あるものを売り込むためのセールス・トーク、生き残りをかけた自己アピールなどある程度条件を絞り込んでトレーナーから与えることもある。

この訓練も他の訓練と同様、話者だけの訓練ではなく聞き手の訓練をも目的にしている。その方法は聞き手による質問と評価である。聞き手の中から2、3人を選び、話者のスピーチを聞いて、わからないことを質問し、話者に賛成か反対かを表明し、その理由を述べさせる。そのため聞き手はただ話者のスピーチを聞き流すことはできない。聞くポイントとしては、話者のスピーチ作りのポイントを応用すれば事足りる、何をポイント(目玉)にしてスピーチがなされたか、説得される内容であるか、等を考えながら聞くことになる。聞き手によるコメントは、馴れ合いにならないように、思った通り伝えるように学生には言い聞かせている。しかし、聞き手は話者に賛成か反対かを表明した上で、その理由を述べなければならぬので、馴れ合いのコメントはなかなかできない。話者も順番にコメンテーターとなるので、話者も納得ずくでコメントを受け取ることになる。

スピーチとはそもそも聞き手にアピールし、聞き手を説得したり、その説得によりある行動に到らせたりするものであるから、話し手はただ漫然と話すのではなく、ある目的を持ち、行うものである。この訓練を通してそのことを学生は身を持って体験することができる。

兎角スピーチの訓練と言うと話者ばかりに目が向けられるが、この訓練では聞き手の訓練を取り入れていることがユニークであると考えられる。「良い話し手は良い聞き手である」と昔から言われるが、自己主張ばかりで他人の話す内容を分析的に捕らえられないのでは、コミュニケーションは成り立たない。話し手・聞き手の双方向からのアプローチによってより良いコミュニケーターを育てようとするのが、「スピーチ」授業なのである。

量的に少ない5行という英文で表現する難しさもあろうが、反面、短時間で作れ、プレゼンター

ションに時間もかからず、他の学生からのフィードバックも速いので、訂正も素早く行える。1時間の授業の中で、学生の人数が少なければ何度も順番が回ってきて、かなりの効果をあげることができるのではないか。前もって長い英文原稿を用意する必要もないので、学生の事前の負荷は軽減される。逆に授業中の負荷は重くなるが、適度の緊張と短時間に物事を処理する能力も養えるというメリットもあり、授業での刺激度が高まり、学生の授業に対する充実度は高まると考える。

以上のような観点から、本格的なスピーチへの前段階としての「5行スピーチ」訓練の有効性を主張したい。

3. 原稿の書き方指導

3-1. 英語文化と日本語文化の考え方の間

スピーチの構成法として最も一般的な方法は以下のようなものだ。

Introduction

Body

Conclusion

個々人のスピーチの発表にはいる前に、原稿の書き方を簡単に指導する。しかし、あまり細かい指示を与えない。(Ⅱ. 2-1参照。)スピーチに慣れない学生が細かいことにとらわれると発想そのものが、貧弱なものになってしまいかねないからだ。また、迷いながら書いた文章は、日本語的発想によるものが多数を占める。(長谷川の言う第一言語の干渉によると考えられる。)

学生に、発表前の原稿提出を義務づけ、コメントを与えて返す。ここでコメントする事は細かな英文直しではなく、発想に絞って行く。つまり、トピックの絞り込みに必要と思われることにとどめるのである。わざと学生の発想の日本的部分を露呈させることにより、学生の内にある日本文化に直面させる目的がある。

多くの学生に見られることだが、彼らのスピーチ原稿は具体性に欠けるものが多い。「状況・情景説明を聞いていて、容易に頭にその情景が浮かんでくる」原稿を書く学生は稀なのである。これは、何も英語に限ったことではない。おそらく日本語で原稿を書いても同じことであろうと容易に想像できる。日本語という言語が持つ特徴が原因であろう。日本語では事実をこと細かく説明しなくても「何となく」通じてしまう(あるいは、通じたと勘違いする)独特のコミュニケーション形態をもつ。(これは日本語批判ではなく、ただ文化の特徴を述べただけである。)この日本語的発想で英文を書き、スピーチを行うと、英語として聞いていて、「何とも説明不足のスピーチだな」という印象を受けてしまう。発表している学生本人は気づきにくいことであるが、その発表を聞く学生には解りやすいことである。英語音声訓練の最初の段階で、授業内容をテープに録り、何度も聞き返すという訓練をするが、その場合でも自分の音声よりも他の学生の音声についてのコメントがしやすいのと同様のことではないかと思う。他の学生のスピーチであれば客観

的に成れるからではないだろうか。「スピーチ」という授業では、この様に他の学生の発想を客観的に見ることからはじめ、自分自身の発想についても客観視できる（自己客観視できる）ようになることを目標の一つにしている。自己客観化こそが自己中心的なコミュニケーションを防ぎ、相互理解に通じる基本的要素だと考える。

日本語的発想を指摘することで英語的発想の違いを明らかにするが、日本語的発想を完全に排除してしまおうというのが目的ではない。日本で生まれ、日本に育ち、日本で暮らして日本語を使用している限り、日本人が無意識に言語活動を行うときには日本語的発想になってしまうものである。このことに気づかずに英語を話そうとすると、摩擦とか矛盾とかが生じると筆者は考える。個人が持つ文化は空気のようなもので、意識しなければ認識もできないし、理解もできない。つまり、他の文化との違いに気づくことすらできなくなる。「自文化に気づいて認めてこそ、他文化を認め尊重できる」という前提のもとで、「スピーチ」授業は行われる。日本語的発想の指摘を抜きに、英語的発想のみを教え込んでも、文化と文化の間には立てない。どちらか一方に偏った見方しかできなくなるものである。この様な教え方では、砂上の楼閣を構築することになる。従って、この授業では、日本語的発想を指摘する段階を取り入れているのである。

柳沢が「ディベートという手法を正当化しようとするあまり、日本の社会のいろいろな局面をむりやり『問題視』している嫌いがあるように見受けられる。また、その問題の原因を、ディベートのような西洋型の議論の欠如にむりやり押しつけているように見受けられる。」と指摘するように、筆者は「ディベート」に発想転換の効用があることについては認めるが、それを強行に押し進めることには疑問がある。ディベートという西洋文化をそのまま無批判に受け入れることがそのまま日本人全体のコミュニケーション能力の向上につながるとは考えない。時間はかかるが、「ディベート」という一つの文化と取っ組み合い、試行錯誤しながら日本語的発想の中に埋め込まない限りは、「ディベートの定着」はないのではないかと考える。強行に「ディベート」導入を押し進めることによって、かえって「ディベート」への誤解を生み、反発をも生むことになりかねない。

上記のような考えのもとに、日本人を対象とした発音・発想訓練として「スピーチ」授業を提案し、実践しているのである。

3-2. パラグラフライティングの手法

学生のスピーチ原稿をまず発想法から指摘し、実際の発表の中でも発想法を押さえてコメントを与える。それから効果的な英語の組み立て・表現について、解答を与えるのではなく学生自らが気づき、学生自らが辞書などを使って英語と格闘する段階に移る。

この段階で大切なことは、学生が行っているのは「コミュニケーションのためのスピーチ」であるということを学生が認識することである。常に聞き手のことを考え、学生のスピーチが聞き手に解るかどうかを判断の基準にし、自分が与えようとしている情報について聞き手はどの程度

まで知っているか、つまり、どこまで説明が必要なかを推し量る必要がある。判断が付かない場合は、相手は何も知らないという前提に立たなければならないが、多くの学生が自分の知っていることは相手も多少知っているという前提で、原稿を書くものである。したがって、聞き手にとって必要な情報がもれてしまって、何を説明しようとしたのか判然としないものになってしまうことがよくある。

このような失敗をできるだけ少なくする方法として、パラグラフ・ライティングの手法を使う。トピック・センテンスを中心に、肉付けをしてパラグラフを構成し、パラグラフ間の関連を論理的に組み立てていく方法である。パラグラフ・ライティングの手法により、書き手の意図を整理することができ、論理性が生まれる。

コツを掴んだ学生は、必要以上に長い文や極端にブツ切れの文章がすくなくなり、簡潔で締まった英文を工夫して書くようになる。自分の表現したいことを組立て、スピーチの原稿を書くことは、スピーチだけでなく日常的な会話の場での表現も上達させる効果を持つと考える。文章表現上達の秘訣は、文章構成に秀でることである。文章構成を考えるためには、英語の表現・語彙・文法をなおざりにすることはできない。この段階に来て初めて文法や語彙・表現の重要性が学生にも理解でき、それらを学習する意味が見いだせるのではないか。第一原稿の手直しの際、細かく文法・語彙についてコメントしないわけはこうした理由による。いくら口を酸っぱくして文法・語彙の重要性を説いたところで、必要性を感じなければ、ただの説教である。学生自らがその重要性に気づき、自らが努力すること（自主性）を育てるためには時間を必要とするが、その自主性を持つことによって、学生のライティングの能力は飛躍的に伸び、しかも定着しうるものになる。

3-3. スピーチの上手な学生の視点・下手な学生の視点

スピーチの上手な学生の視点・下手な学生の視点の大きな違いは、「スピーチの中で何を問題にし、どのように展開していくか」についてはっきりとした方針をもっているか否かである。スピーチの発表を聞いて、そのスピーチがよく理解できなかった学生に対し、日本語で「結局何が一番にいたかったか」という疑問を投げかけると、答に詰まってしまう学生が非常に多い。また、聞き手にはスピーチの意図が理解できなかったにもかかわらず、発表者が意図を述べる場合には、展開に無理が生じていたり、独りよがりな発想をしていたりする場合がある。逆に、スピーチの意図が聞き手にもはっきり理解できる場合は、学生は日本語でも自らの言葉ではっきりと表現でき、的を得ている。

英語スピーチの上手・下手は、英語の能力というよりは母語での論理展開能力で決まるといえるのではないか。母語での論理展開能力は生まれたときからもっているものではなく、母語を習得する課程で訓練し身につけてものであるから、訓練することにより強化できると考える。残念ながら日本の「国語教育」の中にこの能力を訓練するという発想を欠いてきたように思われる。

しかし、欠けていたものは欠けていたものであるから、今さら愚痴をこぼしても仕方がない。訓練によって得られる能力であれば、訓練によって強化していく他はないのである。従って、「スピーチ」授業では日本語の発想訓練を含んでいるのである。文化間の溝を埋めるために必要なことを端折って、「英語」にだけ目を向けることができない理由がそこにある。cross-cultural を意識し、double-cultural, or multi-cultural thinkingへ導く手掛かりがそこにある。

外国語を通して母語での論理展開能力を訓練していく際、必要な視点は通訳の視点である。「通訳とは何か」を考えてみると、逐次外国語を母語に、母語を外国語に直す直訳技能ではなく、文化翻訳技能であると考え。結婚式などで日本人がする日本語のスピーチの冒頭に「本日はお日柄もよく云々」と始めることがあるが、これは英語にはできない。もし、英語に通訳するとすれば、この冒頭の部分はカットされるであろう。通訳とは、Aさんが言った内容の意図を歪めないで、外国人であるBさんに解る内容に置き換えることであろう。したがって、通訳にはAさんの持つ文化とBさんが持つ文化の両方に精通していなければならないことになる。つまり、2つの文化の間点に立ち、どちらも等距離に見るという客観性を持っていないといけない。

21世紀を迎え、地球の中で色々な文化を持った人々と共生していく際には、全世界の人々がある程度の「通訳の視点」を持って接していくことこそ戦争を起こさない平和な地球にするためには欠かせないことだと信じる。だから、「スピーチ」授業の重要性があるのだと確信する。

3-4. 事実と意見を分ける訓練 (物の見方・考え方、整理法)

学生のスピーチ原稿を直したり、授業での様々なプレゼンテーションを聞く際に気づくことがあるが、学生の英文は事実と意見と感想が入り交じって表現されている場合が多い。言いたい内容に対して学生の思い入れが強ければ強いほど、事実と意見と感想が錯綜する傾向が強い。

事実を整理して述べそれに対する意見・感想を述べるという手法は、ジャーナリストの文章手法である。その文章手法を身につけるには時間が必要である。物の見方・考え方を日常生活の中で事実と意見・感想に分けて整理する習慣をつけるべきである。そのために新聞のコラムなどを事実の部分と意見・感想の部分に分ける練習を積むことに効果があると考え。「スピーチⅢ」の内容になるが、News Reportを口頭でさせることになっている。これにより日常的に題材を探し、事実と意見・感想に分けて整理する習慣をつける助けになるのではないかと考える。

また、英文を書くためには英文をたくさん読んで表現・語彙をストックしておく必要がある。新聞を読むことは当然として、楽しみながらも物の見方・考え方、整理法といったものを効果的に気づかせ、しかも英文の見本になるものが存在する。それは探偵小説 (detective story) である。特に、事件現場の描写、登場人物の描写の仕方など参考になる文章にたくさん出会う。表現と発想法の宝庫ではないかと考える。

現在、いくつかの訓練法を思索中であるが、「スピーチ」授業の実践の中で定着した訓練法を確立していくことが今後の課題といえる。

Ⅲ 結論（まとめ）

英語スピーチの添削方法というテーマで始めた本稿ではあるが、効果的なスピーチの書き方指導という色彩が強くなってしまったようである。実際に効果的に英語スピーチを添削するという作業は、完成度の高い英文であればあるほど効果的になると考える。まさに各段階からの緻密な計算に基づいた教授があって初めて学生の英文構成力が高まり、プレゼンテーションにおいても達成感が得られるのではないかと筆者は考える。そういう意味で「英文スピーチの効果的な添削方法＝英文スピーチの効果的な作文方法」と考えるべきではないかと思う。

しかし、学生が実際に英文を書かずして、方法のみの知識を持って意味がない。学生が自ら英文を書き、文化の違いや自らの作文の拙さに気づき、積極的に取り組んで完成度の高い作品にしようとする気持ちをいかに育てるかが重要になってくると思う。「スピーチ」授業を通してこの重要性を学生に気づかせることができるよう、授業自体もシラバスもよりよいものに改良していこうと考えている。

また、英文1文1文にこだわって文法的観点からだけの「木を見て森を見ず」的な添削を行うのではなく、「通訳の視点」を持った添削を行うべきではないか。文化翻訳という視点を持たなければ、外国語での効果的なスピーチを構築することはできない。外国語で効果的なスピーチをするためには、文化間で発想の違いがあることに気づき認め、その発想の溝をどう埋めるのかに腐心し工夫することが必要になる。外国語を介して色々な文化体系を持つ人々と交流・共生していくためには、全世界の人すべてが努力し続けなければならないことであろう。

その努力の方向性を「スピーチ」授業を通して学生と共に探し求めたいと考える。

<参考文献>

- 磯貝友子、『アカデミックライティング入門 英語論文作成法』、慶應義塾大学出版会、1998。
 岩村圭南、『大学院留学 The Speaker's Manual』、(株)アルク、1995。
 小林薫、『英語通訳の勘どころ 体験的通訳論』、丸善ライブラリー、1999。
 財団法人語学教育研究所編著、『英語指導技術再検討』、大修館書店、1988。
 p.60、p.73、p.118
 崎村耕二、『英語で論理的に表現する』、創元社、1998。
 崎村耕二、『英語の議論によく使う表現』、創元社、1996。
 崎村耕二、『英語論文によく使う表現』、創元社、1991。
 杉原庄吉、『理科系のための英文作法』、中公新書、1994。
 鈴木佑治、吉田研作、霜崎實、田中茂範共著、『コミュニケーションとしての英語教育論』、アルク、1997。
 竹野茂、「本学における『増幅法による英語音声訓練授業』について」、『宮崎公立大学人文学部紀

要第2巻第1号』、1994、pp.41-52。

竹野茂、「本学における『増幅法による英語音声訓練授業』について--2年目を迎えて--」、『宮崎公立大学人文学部紀要第3巻第1号』、1995、pp.32-44。

竹野茂、「21世紀の英語教育」、『宮崎公立大学公開講座3 英語の魅力-国際化時代のコミュニケーション・ツール』、1998、pp. 155-188。

多田房子、『外国語としての英語教授法』、南雲堂、1978。

中村保男、『翻訳の技術』、中公新書、1973。

長谷川潔、『英作文の指導法』、大修館書店、1979。

松本茂、『英語ディベート実践マニュアル』、バベル・プレス、1987。

松本茂、『3ヶ月英会話テキスト7月号』、NHKテキスト出版、1994。

松本茂、『3ヶ月英会話テキスト8月号』、NHKテキスト出版、1994。

松本茂、『3ヶ月英会話テキスト9月号』、NHKテキスト出版、1994。

柳沢賢一郎、『入門ディベート論争の技術』、明日香出版社、1998。

<参考資料>

参考資料として、Speech I、II、IIIのシラバスの抜粋を挙げておく。

担当者 専任講師 竹野 茂/兼任講師 中津燎子 (スピーチ I、II、III共通)

科目名 英語音声指導法 (Speech I)

講義のねらい

この講義「英語音声指導法 (Speech I)」では、異文化としての英語音声の確立を目指し、その英語音声の指導法の習得を目標としています。英語音声の指導に際して、音声学的知識のみならずその実際の運用力を身につけるのが、この講義のもう一つの目標になります。

英語音声を指導する際、その指導者がコミュニケーションのための十分な発音ができることは、必須の前提条件です。この講義では、受講学生自らが英語音声を体得しながら、発声器官・発声法を分析的にとらえ、受講生がお互いにコメントし合い、聴覚的に他人の英語音声をとらえ、指摘し矯正する技術を学びます。

音声習得に限らず、外国語を学ぶ目的は、その国との同一化を求めることではなく、主体的に外を見、自国や自分を考えることにあります。つまり言語 (音声を含めて) の比較を通じて文化や風俗、ひいては思想、価値観、人間観の比較こそが外国語学習の最大の意義であり、究極の目標になります。このような観点で音声習得を考えるなら、われわれ日本人にとっては母国語としての日本語音声の中で育ち、その特質を日常無意識に身につけ発声しています。従ってこの前提を踏まえた効果的な発音指導・発音訓練がどうしても必要になってくるわけです。

この講義では、訓練という要素が取り入れられています。将来教師となる受講者自らが体得しなければ、その教師から学ぶ学生に対して適切な分析に基づく指導をしていくことができません。

この観点で、訓練の要素が必須になるのです。

新学習指導要領案（外国語）には、次のように記されています。

4. 外国語

第1 目標 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

第2 各言語の目標及び内容等

英語

- 1 目標 (略)
- 2 内容

3. 言語活動

英語を理解し、英語で表現する能力を養うため、次の言語活動を3年間を通して行わせる。

ア 聞くこと

主として次の事項について指導する。

- 1) 強勢、イントネーション、区切りなどを基本的な英語の音声の特徴を捉え、正しく聞き取ること。
- 2) 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、具体的な内容や大切な部分を聞き取ること。
- 3) 質問や依頼などを聞いて適切に応じること。
- 4) 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること。

イ 話すこと

- 1) 強勢、イントネーション、区切りなどを基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音すること。
- 2) 自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと。
- 3) 聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりすること。
- 4) (略)

この授業では、上記に引用した要素のほとんどを含んでいます。従って、学生自らが教壇に立った場合、この授業で培った自らの体験というものが役立つように、この授業は組まれています。例えば、2の1のアの（ア）やイの（ア）に対応するためには、呼吸法を正しくマスターすることによって、強勢を日本式ピッチ強勢ではなくストレス強勢にすることが可能になりますし、文章を表現読みする事によって個々の語だけでなく語と語の連結やイントネーションの違いを体得できますし、また他人の音声を聞き取ってコメントしなければなりませんので、当然聴覚的にも

正しく聞き分ける訓練にもなります。イの(イ)、イの(ウ)の要素は、主には、「英語科スピーチ指導法 (Speech II)」や「英語科ディベート指導法 (Speech III)」で扱うこととなりますが、この授業では、10、11の「音声表現」の單元において、徹底的に分析・体得してもらいます。

(中略)

評価方法

試験および口頭発表 (詳細は追って通知する)

講義・演習計画

以下の項目を次のページに示すスケジュールに従って総合的に学習する。

1	オリエンテーション・授業の目的とルール この授業の内容がどのようなものか、また授業の目的はどのようなものかを明らかにする。 音声訓練の要素と指導法の関連を明らかにする。
2	基本運動1から5 英語の音声を発音するための唇の筋肉を作る。発音の基礎となる発声法・発声器官についての知識を持ち、自らの発声法を構築する。
3	唇で作る音 B・P・M・W (以下増幅音)
4	舌の硬さと動きと息で作る音 T・D・N・L・R
5	口形と息で作る母音 A・I・E・O・U・(Y)
6	歯と唇と息で作る音 F・V
7	口輪筋全体を使って作る音 C・G・J・K・Q・H・X・Y・S・Z 2～7までは、数回にわたって練習する。これもまた基本として毎回行う。 それぞれのアルファベットについてのアタック音・息に注意を払う
8	アルファベット全体廻し・五十音・音連結・口形移動 アルファベットの各音を全体で、タイミングを計りながら廻していく。 英語五十音により、母音と子音の分離を訓練する。また、その二つの訓練の際に『息』を意識し、音の連結・口形移動をスムーズにおこなえるよう訓練する。
9	単語 (カタカナ音との違い確認) 増幅音から普通音へ アルファベットの原音を含んだ単語の発音に、音の連結・口形移動を応用し、増幅音から普通音に移行する訓練を行う。(ここまでが前期の目標とするところである。)
10	音声表現 (1) 詩・ライム 前期の増幅音中心の内容から、詩やライムを用い、ネイティブ・スピーカーに許容される音声を体得する。また、同時に、単語の練習はウォームアップとして用いる。
11	音声表現 (2) スピーチ(a) (b) チャップリンの「独裁者」からの演説などを取り上げ、総合的な音声確立を目指す。
12	音声表現 (3) 総括スピーチ・講義総括レポート この講義の総まとめ及び応用として、学生自らが英語による「授業の総括」スピーチを作成し、口頭発表を行う。その発表の原稿を書き直し、レポートとして提出する。

科目名 英語科スピーチ指導法 (Speech II)

講義のねらい

「英語科スピーチ指導法 (Speech II)」は「英語音声指導法 (Speech I)」の基礎の再確認段階と発展段階として位置付けされるものである。この授業は、「英語音声指導法 (Speech I)」同様、講義の要素だけでなく訓練の要素も持ち、実践で即応ができる力とその指導法を習得する。「英語音声指導法 (Speech I)」では異文化としての英語音声の確立を目指したわけであるが、「英語科スピーチ指導法 (Speech II)」では異文化対応のための発想法の習得についてより重点が置かれている。

これは新学習指導要領に掲げられている「言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」という目標に完全に一致したものである。将来指導者となる学生が自ら体得したものを、教育の実践に生かせるよう、指導法の教授も考慮に入れられる授業である。

内容としては、「英語音声指導法 (Speech I)」で習得した英語音声をもとに、英語による「20のトビラ」等の発想訓練や「フリー・リーディング」、「紹介スピーチ」「ブックレポート」等の様々なスピーチを学生自らが作り音声表現を行い、日本語・英語の違いを認識し異文化対応を考慮しながらの指導方法を体得する。ここで学生が作るべき質問、スピーチなどは「できるだけ平易で誰にでも分かる英語」によって、込み入った事まで表現させるように工夫し、中学校からの段階に応じたコミュニケーションの基礎的要素を指導できることをめざして教授される。

学生は自ら作り発表するスピーチにより自己表現力を磨くと同時に、質問訓練を通して事実認識力、批判力を養うことも目的としている。これからの国際社会においては、他人が提示した情報 (スピーチ、プレゼンテーション等) に対して、分かったつもりになるのではなく、疑問点を出して疑問点がなくなるまで物事を突き詰めて考えることが必要不可欠になる。そのために他人に誤解を与えない質問をつくり出したり、また提出された質問に対して過不足なく説明することを訓練し、指導法として。この訓練により、物事を説明する際、できるだけ疑問の余地を与えない説明のまとめ方・考え方を身につけようとするものである。

この授業を受ける際、英語・日本語の持つ文化背景を無視してはならない。前段で述べた「過不足のない説明」とは、日本を含め世界中の国々の人を対象にして行うべきものである。日本人にだけ通じる説明では国際的に通用しない。ひとりよがりにならない客観的な国際的に通用する説明こそが今の日本に要求されている。昨今の国際会議において、諸外国から突き付けられている問題の多くは、日本人の説明不足から生じていることを認識し、21世紀を担う学生に説明能力をつけることが、今の教育に課せられた課題であると信じる。このような認識から、この「Speech*」という授業は構築されている。

*英語音声指導法、英語科スピーチ指導法、英語科ディベート指導法の総称として用いたものである。

(中略)

講義・演習計画

1	音声表現 (3) スピーチ Speech I で行ったチャップリンの「独裁者」からの演説に引き続き、M.L.キング牧師の演説を取り上げ、総合的な音声訓練をすると同時に、語の連結、語、句、文の強勢、イントネーション、区切りなどを学び、指導法への応用を考える。
2	コメント訓練 他の受講生が行った音声表現に対して、原音・息・音の連結などについてのコメントし、音声の分析能力を養い、自らの音声表現に役立てる。
3	音声表現 (4) フリー・リーディング 受講生自らが選んだ詩の一節、短い物語等を用いて、総合的な音声表現の訓練を行い、指導法を身につける。 コメント訓練と併用
4	音声表現 (5) 紹介スピーチ (英語) 身近な人、もの、出来事などを他を意識しながら、紹介するスピーチを行う
5	質問訓練 (1) (日本語) 紹介スピーチを聞き、聴いた内容に対する疑問点を明確な日本語で質問する。 プレゼンター班と質問班とコメント班の3つの班わけを行い、それぞれが役割をもって、批判的に情報を分析する力を養う。
6	音声表現 (6) ブックレポート (1) (日本語) 日本文化に関係する日本語の本を選択し、本の概要 (2分) と意見表明 (3分) を日本語で行う。その際、論理的に直接英語へ翻訳可能であることを目指し、プレゼンテーションの内容を絞り込むこと。
7	音声表現 (7) ブックレポート (2) (英語) 日本文化に関係する日本語の本を選択し、本の概要 (2分) と意見表明 (3分) を英語で行う。その際、論理的な英語を意識すること。
8	質問訓練 (2) (英語) 様々なスピーチ、ブックレポート等を聞き、聴いた内容に対する疑問点を英語の単文をもちいて質問する。自らが体験することにより、教授する際の指導のポイントを体得する。 プレゼンター班と質問班とコメント班の3つの班わけを行い、それぞれが役割をもって、批判的に情報を分析する力を養う。
9	音声表現 (8) 各種スピーチ訓練 (英語) 5行スピーチ 5行の英文で、話者が言いたいことを絞り込む訓練。 訓練した音声を残すこと、ユーモアを入れることなどの注意点を守る。
10	音声表現 (9) 説明訓練 (1) (日本語) 明確な日本語 (中間日本語) による過不足のない説明を心掛ける。 質問訓練との併用により、「過不足のない説明」とは何かを実践を通して体得すること。
11	音声表現 (10) 説明訓練 (2) (英語) 常に説明する対象者を日本以外の世界の人々であるとする。(自他の認識訓練) 明確な英語による過不足のない説明を心掛ける。 質問訓練との併用により、英語での「過不足のない説明」とは何かを実践を通して体得すること。

12 音声表現 (11) 自己アピール・スピーチ訓練

5行スピーチを一步すすめ、セールス・トーク、アピール、生き残りをかけた自己アピールなどを行う。質問訓練との併用

13 発表・評価

各種スピーチ、ブックレポートにおけるプレゼンテーションと質問者との質疑応答のやり取りを総合的に判断し、評価する。

科目名 英語科ディベート指導法 (Speech III)

講義のねらい

「英語科ディベート指導法 (Speech III)」は「英語音声指導法 (Speech I)」「英語科スピーチ指導法 (Speech II)」の基礎に基づいた仕上げ段階として位置付けされるものである。この授業は、「英語音声指導法 (Speech I)」、「英語科スピーチ指導法 (Speech II)」同様、訓練的要素を十分に取り入れた実践的講義である。

教壇に立つ英語教師として先ず求められることは、高度な英語の運用能力である。しかも複雑なことをできるだけ平易な英語で表現しうる能力こそ、これからの時代を生き抜く為の語学能力であろう。その様な能力を身につけた教師が、学生を前にしてその能力を遺憾なく発揮し、学習指導要領に則りそれを実践的に具現化した指導を加え、次世代の学生を高いレベルのコミュニケーション能力に導くことを目標にこの講義は練られている。

「英語音声指導法 (Speech I)」では異文化としての英語音声の確立、「英語科スピーチ指導法 (Speech II)」では異文化対応のための発想法の習得について重点が置かれていたが、「英語科ディベート指導法 (Speech III)」ではこれまでの訓練成果を駆使し、日本語および英語によるディベートの実践に重点を置いて訓練を行い、その指導法についても実践的に学び取る。客観的事実に基づく論理性のある主張を基盤としたコミュニケーション能力を養うことを目的とする。

「英語音声指導法 (Speech I)」で訓練した英語音声をもとに、「紹介スピーチ」「ブックレポート」等の様々なスピーチを学生自らが作り音声表現を行いながら、日本語・英語の違いを認識し異文化対応の訓練を経験してきた。これまでの訓練経験を最大限に駆使し、ディベートの形式を取り入れながら、21世紀の世界でサバイバルするための語学力を身につける。

学生は自ら作り発表するスピーチにより自己表現力を磨くと同時に、質問訓練を通して事実認識力、批判力を養うことを目的としている。これからの国際社会においては、他人が提示した情報 (スピーチ、プレゼンテーション等) に対して、分かったつもりになるのではなく、疑問点を出して疑問点がなくなるまで物事を突き詰めて考えることが必要不可欠になる。そのために他人に誤解を与えない質問をつくり出したり、また提出された質問に対して過不足なく説明することを訓練する。この訓練により、物事を説明する際、できるだけ疑問の余地を与えない説明のまとめ方・考え方を身につけようとするものである。「過不足のない説明」とは、日本を含め世界中の国々の人を対象にして行うべきものである。日本人にだけ通じる説明では国際的に通用しない。

ひとりよがりにならない客観的な国際的に通用する説明こそが今の日本に要求されている。昨今の国際会議において、諸外国から突き付けられている問題の多くは、日本人の説明不足から生じていることを認識し、21世紀を担う学生に説明能力をつけることが、今の教育に課せられた課題であると信じる。

特に、「英語科ディベート指導法 (SpeechⅢ)」の中心に置かれるディベートにおいては、Why-Becauseを中心に議論が成り立っていく。そのため、事実を明らかにするための疑問の呈し方を身につけることと説明能力とは必須の能力と言える。また、理由を形成するためにはごまかしのない客観的事実の積み重ねが必要になる。そのためには情報収集能力もまた必要不可欠な能力と言える。情報の集め方・取舍選択の仕方など、ディベート的考え方を基にそれらの能力を開発・発展させていくことも「英語科ディベート指導法 (SpeechⅢ)」に課せられた使命であると考えている。

ディベートとは基本的に西洋的なものの考え方である。主張を前面に押し出さない「奥ゆかしい」日本文化には本質的にあわないという考え方も存在し、一面的には正しいと言える。従って、欧米で行われているディベート教育を全くそのままの形でこの訓練に採用しても、学生に定着するかは疑問の余地がある。そこでこの訓練を行う際、英語・日本語の持つ文化背景を無視してはならないのである。教壇に立つ際に、文化背景の差異に着目した実践経験を積んでいることが、ネイティブ至上主義を生まず、日本人学生に適切な指導・助言を与えられることにつながるものである。

それではその文化的背景とは何かを考えてみよう。欧米では、子供が言葉を話すようになった段階から、家庭内や学校教育の中で、まさにディベート的な考え方で言語教育がなされる。日本の家庭教育および学校教育では、これまでほとんど意識されてこなかった要素である。日本においてディベート教育をするためには、母語でのディベート的訓練が日本人学生にはほとんどなされていないという前提で行われなければならないというのは事実である。つまり、欧米文化と日本文化の文化的ギャップを埋めなければ効果的なディベート教育は行えないことになる。このことを意識し、特に「英語科スピーチ指導法 (SpeechⅡ)」において発想訓練、ブックリポートを取り入れたのであるが、実際にディベートの実践に移行したときに、このギャップをより強く意識させられることになる。このような認識を踏まえ、この「英語科ディベート指導法 (SpeechⅢ)」という授業は構築されている。

このように「英語科ディベート指導法 (SpeechⅢ)」は、単に英語教育というよりも広く言語教育を意識しつつ行われるものである。

(略)

受講生へのメッセージ (抜粋)

また、この授業ではディベートという形式を利用はするが、その形式に飲まれることなく、常に自分と他人とを意識し合い、「相手を理解し、相手によりよく自分を理解してもらうためには、どのような説明が必要であるか」とか「2者あるいは多者の文化的違いを理解し、その文化的な

違いの歩み寄りをどこに見いだすか」という問題を瞬時に解決する能力を身につけてもらいたい。ただ単なる主張のぶつけ合いでない、建設的な意見形成・問題解決の糸口としての議論のあり方を学んで欲しい。

講義・演習計画

以下の項目を次のページに示すスケジュールに従って総合的に学習する。

<p>1 デイバート導入訓練 (1) 説得のための自己主張、即興によるまとめと意見 (日本語・英語)</p> <p>A. 「ぜひお勧めの映画」 自分で見た映画で、ぜひお勧めのものを発表する。ねらいは次の3点である。</p> <p>5) 自分の意見を言う (自己主張) 2) ポイントを絞る</p> <p>1) 他人を見る気にさせる (説得性)</p> <p>5) "NEWS REPORT" 1 新聞・雑誌等の記事を読んで、その場で概要と意見を述べる。ねらいは次の3点である。</p> <p>1) 情報を整理する。2) 自分の意見を言う。3) 1、2を短い時間でまとめる。(即興性)</p>
<p>2 デイバート導入訓練 (2) 説得のための自己主張、即興によるまとめと意見 (日本語・英語)</p> <p>A. 「腹の立ったことなど」 腹の立ったことなど強く感情を動かされたものを発表する。ねらいは以下のようなことである。</p> <p>4) 自分との関わりをつける。題材を他人事ではあり得ない、強い感情を伴うものとし、一般的、解説的でない自分の意見を言う。</p> <p>1) 自分の強い感情を表現する。自分で表現がしたい、強い感情を自分の言葉で発表する。</p> <p>1) 一人よがりにならない--聞き手を意識する。なぜその感情を持つのか他人に分からせること。</p> <p>B. "NEWS REPORT" 2 「賛成か反対か」 新聞・雑誌等の記事を読んで、その場で概要と意見を述べる。"NEWS REPORT" 1のねらいに加え</p> <p>1) 自らの立場を明確に表明する。(自己主張) 2) 瞬時に自分の立場を決定する。(即決力)。</p>
<p>3 デイバート導入訓練 (3-1) 「立論訓練」(日本語)</p> <p>A. 論題に関する資料を、与えられた時間内で読み、立論を組み立て、発表する。ねらいは以下の4点。</p> <p>1) 論題に対し、肯定か否定か自分の立場を決める。最後まで自分の立場を通す。</p> <p>2) 自分の主張を論理的に構成する</p> <p>3) 自分の主張に説得性を持たせる。理由を述べ、証拠を挙げる。</p> <p>4) 聞きっぱなしにしない。発表者に対し質問する。</p> <p>B. 立論の理論的説明</p>
<p>4 デイバート導入訓練 (3-2) 「立論訓練」(英語)</p> <p>A. 論題に関する資料を、与えられた時間内で読み、立論を組み立て、発表する。ねらいは以下の4点。</p> <p>1) 論題に対し、肯定か否定か自分の立場を決める。最後まで自分の立場を通す。</p> <p>2) 自分の主張を論理的に構成する</p> <p>3) 自分の主張に説得性を持たせる。理由を述べ、証拠を挙げる。</p> <p>4) 聞きっぱなしにしない。発表者に対し質問する。</p> <p>B. 立論の理論的説明</p>
<p>5 デイバート導入訓練 (4-1) 「ミニデイバート」(日本語)</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ディベートの方法、形式、各パートの役割と構成等についてトレーナーからの説明 ・全体で30分程度(立論、反駁3分、質問2分)のミニディベートを実際にやってみる。その場でチーム及び肯定側・否定側を決める。与えられた時間内で与えられた資料を読み論を組み立てる。
<p>6 ディベート導入訓練(4-2)「ミニディベート」(英語)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体で30分程度(立論、反駁3分、質問2分)のミニディベートを実際にやってみる。その場でチーム及び肯定側・否定側を決める。与えられた時間内で与えられた資料を読み論を組み立てる。
<p>7 ディベート導入訓練(5-1)「フル・ディベート実践」(日本語)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ディベートの方法、形式、各パートの役割と構成等についてトレーナーからの説明 ・全体で52分のディベートを行う。フォーマット(立論5分、反駁3分、質疑応答3分)1ヶ月前にチーム及び肯定側・否定側を決める。 <p>ねらい1) ミニディベートの体験を生かし、資料収集、事前打ち合わせからディベートまですべて実際にやってみる。</p> <p>ねらい2) 今までの訓練を生かす。</p>
<p>8 ディベート導入訓練(5-2)「フル・ディベート実践」(英語)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体で52分のディベートを行う。フォーマット(立論5分、反駁3分、質疑応答3分)1ヶ月前にチーム及び肯定側・否定側を決める。 <p>ねらい1) ミニディベートの体験を生かし、資料収集、事前打ち合わせからディベートまですべて実際にやってみる。</p> <p>ねらい2) 今までの訓練を生かす。</p>
<p>9 ディベート実践訓練(1)「フル・ディベート実践」(英語) コメント訓練(日本語)</p> <p>導入訓練を生かし、様々な論題についてディベートを実践し、コミュニケーション能力を養う。実践チーム以外は、コメントの練習をする。(日本語)</p> <p>ねらい) 他人の意見を聞き、自らの意見を形成し、判断し、日本語で表現する。 (判断力・表現力)</p>
<p>10 ディベート実践訓練(2)「フル・ディベート実践」(英語) コメント訓練(英語)</p> <p>導入訓練を生かし、様々な論題についてディベートを実践し、コミュニケーション能力を養う。実践チーム以外は、コメントの練習をする。(英語)</p> <p>ねらい) 他人の意見を聞き、自らの意見を形成し、判断、英語で表現する。 (判断力・表現力)</p>
<p>11 ディスカッション(1)(日本語・英語)</p> <p>テーマ(解決すべき問題)を与えて、フリーにディスカッションをさせる。 必ず結論を出すよう心掛ける。</p> <p>ねらい1) 一定時間の中で建設的に物事を考え、結論に導くような意見の展開を経験する。</p> <p>ねらい2) 他人の意見を聞きながら、議論の方向性を判断し、自らの建設的な意見を表明する。</p>
<p>12 ディスカッション(2)(日本語・英語)</p> <p>テーマ(解決すべき問題)を提案させ、フリーにディスカッションをさせる。 必ず結論を出すよう心掛ける。</p> <p>ねらい1) 自らの身の回りの問題点を瞬時に考え、提案する。(問題意識)</p> <p>ねらい2) 一定時間の中で建設的に物事を考え、結論に導くような意見の展開を経験する。</p> <p>ねらい3) 他人の意見を聞きながら、議論の方向性を判断し、自らの建設的な意見を表明する。</p>
<p>13 発表・評価</p> <p>ディベートにおける各種スピーチ、ディスカッションと質問者との質疑応答のやり取りを総合的に判断し、評価する。</p>

